

田老の「復興」、その現在と未来

川手 摂 [かわてしょう]

後藤・安田記念東京都市研究所研究員



明治・昭和の大津波から復興を遂げてきた宮古市田老にそびえる、「防浪堤」。

平成の津波はそれをも越えてまちを呑み込んだが、

いまも人々は父祖の偉業の「防浪堤」に寄り添う。

これからこのまちに、どんな未来が描かれていくだろう。

はじめに

高さ10m超、アルファベットの「x」のような形状の巨大な防潮堤¹⁾を誇った、岩手県宮古市田老。2005年まで田老町という単一の自治体であったこの地域は、明治三陸津波（1896年）、昭和三陸津波（1933年）によって多くの犠牲を出しながらも、そのたび「復興」を遂げてきた。しかし、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震が引き起こした大津波は、一線堤（注1を参照）を破壊し、防浪堤を乗り越えてまちを呑み込む。ふたたび181名の命が失われた。

今度こそ住民挙げて安全な高台に移転するか。やはり先祖が守り続けてきた土地に住み

続けるか。被災後、田老の人々は、侃々諤々の議論を行った。激しいやりとりの末、答えを一つにまとめ上げることは、ついにできなかった。そして、土地区画整理事業による被災現地の再建と、防災集団移転促進事業による高台への移転（市街地後背の山林が大規模に切り拓かれ、新しい住宅団地を造成する）、新市街地を二つに分かつ再建案が決定された。

あの日の地震と津波から6年。田老の新しいまちは今、その案のとおりの骨格を現しつつある。本稿は、「平成三陸津波」からの田老の復興の現在を伝え、その未来を望むものである。

再建されるまちの姿

かつての田老市街地は、防浪堤〈図の黒線〉の内側を埋めつくし、その外側（一線堤〈図の灰線+白線〉よりは内側。野原・野中と呼ばれる地区）にまで広がっていた（図）。これが津波によってほぼ壊滅し、流失をまぬがれたのは、防浪堤内外の山際に張り付いた集落の一部や、市街地の南部を東西に流れる神田川沿いの集落のみであった。

防浪堤の内側には土地区画整理事業で新市街地が再建される。施工面積は 19.0 ha、計画戸数は 180 戸だが、可住地面積は大幅に縮小する。防浪堤の内側部分の中央を縦断していた国道 45 号線は 5 m 拡幅かつ嵩上げされ、40 m ほど山側に移設されたが、住宅はこの国道より山側にしか建設できない。新聞報道によると、2015 年 9 月末時点において、この新市街地における建物の建築許可申請は 30 件で、うち住宅は 10 件（残りは店舗・倉庫など）にとどまり²⁾、現在も住宅（含・店舗兼住宅）の再建は多くない。ただし、5 階建ての災害公営住宅（40 戸）はすでに完成し、入居も済んでいる。

平坦地の住宅再建について市の担当者は、住民が破壊された一線堤=津波に対する防御の完成を待っているのではないか、という解釈を示したが、一方で多くの住民からは、区画が住宅で埋まるとは考えにくいという見通しが聞かれた。その一線堤は、被災前よりも高い、T.P.+14.7 m で再建される。工事は当初計画から大幅に遅れ、現在は着工している（一部ではすでに軀体が立ち上がっている）ものの、完了は 2018 年 3 月の予定である³⁾。

一方、高台移転のために造られたのが、野原地区の後背にあった山林を防災集団移転促

図 被災前（2009 年 7 月）の田老中心部



出典) Google Earth の地図データに筆者が加筆

進事業によって切り開いた、面積 25.5 ha の「三王団地」である。ここには 161 区画が造成され、2016 年 1 月末現在で 95 棟が着工⁴⁾、その後も順調に建設が続いている⁵⁾。団地内には災害公営住宅（集合住宅タイプと戸建てタイプが併存。計 71 戸）も建設された。宅地には、引き渡しから原則 3 年以内に住宅を建設することとされており、災害公営住宅もほとんどの部屋が埋まるようなので、高台には——住宅の戸数だけで言えば——平坦地と対照的に、約 230 戸の新しい街が生まれることになる。

住宅以外の施設の立地であるが、まず公共施設を見ると、高台には保育園や診療所、さらに駐在所、消防署分署、消防団屯所が作られ、複数の公園が整備された。民間の歯科医院も高台に再建された。一方、平坦地には、新規の公共施設はあまり建たず、消防団屯所

と公園くらいである。ただし、浸水しなかった、あるいは浸水はしたものの流失はまぬがれた宮古市田老総合事務所（旧田老町役場）、田老第一中学校、田老第一小学校は、いずれも平坦地の山側に立地している（加えて、市街地南端から2kmほどのところには宮古北高校もある）。

商店・商業施設はどうだろうか。市街地が高台と平坦地に二分されることになったため、商店主たちは、どこで商いを再開するかの選択を迫られた。2012年5月に住民組織「田老地区復興まちづくり協議会」が結成されると、その「商業部会」において、商店主たちは議論を行った。そこでは当初、街にぎわいを創り出すために、一つの「箱」＝共同店舗に集まって、あるいはそれが難しければ、せめて商店を一ヵ所に集約して「商店街」を形成しよう、という希望が語られた。それは一個の夢であった。しかし商店主たちは、徐々にお互いの考え方や立場、置かれた／るであろう環境の違いに直面していく。

再建場所について言えば、津波被災の経験から、平坦地への商店の立地を忌避する商店主がいた。あるいは、商店は平坦地でもよいが住宅は高台に構えたいという人もいた。そうなると、再建資金は当然ながら「二重」になるわけで、その工面に不安を抱き、踏み出せない商店主が出る。とりわけ高齢かつ後継者の見通しが立たない商店主が、大きな借金を抱える決断を避けたことは想像に難くない。「自分の代限り」と考える商店主と、商いの中長期的な継続を考える商店主の意思を統一することの難しさがまずあったのである。付け加えれば、田老では従前から、商売を一つの生業としながらも、漁業権を持ってアワビやウニを採取し、小さいながら畠で耕

作も行うなど、多角的な稼得によって生活を成り立たせてきた商業者も多かった。このような構造のうちに商売を展開する商店主と、「商売一徹」の商店主の間にもまた、意識の齟齬があった。

かくして、平坦地への商店の集約は困難であった。ならば安全な高台に揃って移転して商店街を形成しよう、ということにもならなかった。いくら高台に一定の人口が集まるとはいえ、それは定住人口である。立地的にはいわば袋小路であり、通過交通による流動人口は基本的に生まれない^⑥。そうなると、理美容などごく一部を除くほとんどの業態は成立しないだろうと考えられた。定住人口を相手にする（それも、それほど大きな人口がなくともやっていける）業態と、流動（／交流）人口を視野に入れたい業態の商店主の意見を一致させるのもまた困難だったのである。

結果的に商店の立地は、①平坦地北側（田老一中周辺）、②平坦地南側（総合事務所周辺）、③高台に大きく三分化することになった。①平坦地北側には食料品店（生鮮品も扱う）、ガソリンスタンド、理／美容室、靴屋、牛乳屋がやや拡散的に立地する。また、この地区の国道より海側の非可住地には、「道の駅たろう」が建設されている（2016年7月開業、その後も漸次建設を続け、2017年度に完成予定）。2016年1月に重点「道の駅」に選ばれており、地域活性化の拠点として、国はじめ関係機関の重点支援が行われる（具体的には、駐車場、休憩施設、トイレなどの整備に補助金が充てられる）。道の駅の敷地内には、食堂、ミニスーパー、食料品店、産直品販売店が立地する。また、②平坦地南側には、時計写真店、石油店、食料品店、物産

品店、理容室などが立地する。この地区は①よりも面積的に小規模なため、商店は密集して立地するかたちになっている。

③高台には、理／美容室、日用雑貨・食料品店、スナック、薬局が立地する。高台では、商店（を営む店舗兼住宅）を集約して「商店街」を形成する構想も出された。だがそのためには、抽選で行われる区画の割り当てに例外を設けなくてはならない。商店街を形成したいと考える商店主たちと市が相談した結果、2014年6月に、商店主たちが入居予定者にその可否を問うアンケートを行うことになった。結果は「賛成47、反対52⁷⁾」であった。「商店街」が団地の良い立地をとっても、そう遠くない将来に（商売をやめ、）ただの住宅になってしまう、それならば全員公平に抽選で区画を決めるべきだ、という考えがわずかに勝ったということであろう。これはある意味、住民たちがこれから自分たちの住む場所の将来に、これ以上なく現実的な見方をしていることの表れとも言える。

これまで述べた以外に、平坦地のほぼ北端にあたる長内川近くの国道沿いに、大手コンビニエンスストアが立地する。かつては国道沿いの現在より南に立地していたが、津波で被災し、長らくプレハブの仮設店舗で営業していた。これが2016年2月に本設化したものである。その他、②の平坦地南側よりさらに南側の国道沿いに蕎麦屋と新聞店、また田老駅の南側に酒屋の計3軒が立地する。

減りゆく人口

ここまで見てきたとおり、田老では被災から6年にして、市街地の基盤が再建され、いよいよ新しい街が姿を現し始めた。そして、

そこで新しい生活や商いを始める住民も増えている。しかし田老の前途は、決して明るいことばかりとは言えない。

まず、人口流出は避けられない情勢である。宮古市が2012年10月から13年1月にかけて実施した住民意向調査で、今後の居住場所を田老地区外と答えた人が全体の47.7%に上り、地区内と答えた45.6%を上回った（他に未定が6.7%）。それ以後、この種の意向調査は行われていないが、「田老に残る」という世帯がその後大きく増加したとは考えにくい。

人口の流出と合わせて、多くの住民・関係者から語られたのは、すでに田老を出て行ったり、出て行く意向を示している人々の多くが、資金力があって身軽な若い世代であり、したがって、再建後の田老の人口は高齢化するだろうという見通しがあった。2010年の国勢調査において、すでに旧田老町の高齢化率は33.0%（人口4,302人、うち65歳以上1,421人）だったが、最新の2015年調査では、37.0%（人口3,172人、うち65歳以上1,173人）となっている。また、田老一小の新入生は3年連続で10人台となっており、「次の世代」が先細りしているのも現実である⁸⁾。

そもそも「人口が減る」というのは、どういうことなのだろうか。街から人が消え、空き家が増え、そして、そこに住む人たちを相手にしていた商店が消える。感覚的な言い方をあえてすれば、「活気」が失われるということだろう。これは、単に感覚、雰囲気の問題ではなく、地域の諸活動や行事を担う（とりわけ若手の）人材の不足という形で現象する。縮小社会では、自治体が丸抱えで地域を支えるというモデルは成り立たなくなりつつ

ある。そこに来て地域活動が停滞すれば、住民の生活の基盤さえ危うくなるかもしれない。また、活動の担い手が少数の特定の人を集めて集中すれば、地域社会にひずみが生じるのは必定である。

筆者が今年1月に田老を訪れた時に気付かされたのは、除雪の問題であった。車道には除雪車が導入されるが、歩道などは住民が雪かきをしなければならない。住民が多く、住宅が密集していた被災前なら、それぞれの世帯がそれぞれの家の前の雪を除けばよかつた。しかし現在、とりわけ平坦地には住宅のない区画が多く、その前を除雪する人がいない。住民が少なくなっているので、自分の家以外のところまで除雪しようとすれば、大変な労力になる（し、そもそも誰がそれをやるのかを話し合ったりする必要がある）。かくして雪が歩道に残される。除雪は「地域の力」の反映である。

ところで、田老の定住人口・交流人口の今後を考えるにおいては、「復興道路」に位置付けられ、凄まじいスピードで建設が進んでいる三陸沿岸道路（三沿道）がもたらす影響を考えずには済ませられない。三沿道は高速道路ではなく、通行に料金はかかるないが、高規格道路であるから、現在の国道45号よりも圧倒的に運転がしやすくなり、所要時間も短縮される。このことは、現在田老に留まっている人の側から見れば、たとえば近隣ではもっとも商業施設の集積が見られ、また雇用の場を多く持つ宮古の中心部にアクセスしやすくなる、ということである。このような高速・大量交通手段の整備は、「ストロー現象」と結びつけて考えられがちであるが、田老対宮古の関係に限って考えてみれば、アクセスが容易ならば無理に宮古に住むこともな

いという発想から、住民が田老に残る、あるいは（たとえば「親が建てた家があるなら」と）田老に戻ることを後押しする可能性もあるのではなかろうか。また、もう一步進んで、ベッドタウン化は望めないだろうか。ことそれ自体の善し悪しや、実際に売れるのか否かは別として、筆者が訪問した今年1月時点で、平坦地には「売地」の看板が2区画見られた。

一方、交流人口と三沿道はどのように関わるか。今は、三陸沿岸を南北に往来しようすれば、ほぼ確実に国道45号が利用され、田老にも通過交通をもたらしている。ただ通過するつもりでも、人は「あの」防浪堤や、かつてならば被災跡地を、現在ならば再建されつつある新しいまちの姿を見るのである。しかし、三沿道が開通し、交通の中心がそちらに移れば、そこに田老の街があると知らないまま、車は内陸部を走り抜けていってしまう。田老が「見えなくなる」可能性は、十分にある。

そこで、田老中心部の南側と北側には、「ハーフインター」が設置される（南側の田老第1インターチェンジの下り線〈久慈方面〉には出口だけが、上り線〈宮古方面〉には入口だけが設置され、北側の田老第2インターチェンジはその反対）。これにより、たとえば宮古方面に向かう車が、第2インターチェンジで国道45号線に下り、田老市街に立ち寄り、第1インターチェンジから三沿道に戻る、という交通の流れが期待される。そこで市や地元では、田老の市街地全体を、道の駅を中心に「サービスエリア」と捉え、サービスエリアが設置されない三沿道から交通を誘導したい考えである。だが、北の普代村・田野畠村や岩泉町なども、同じように三

沿道のインターチェンジ近くの「サービスエリア化」を検討しているようである。高速走行する車を専用道から降ろせるだけの「魅力」をまちに生み出せるかが重要になる。

もう一点、地元の人々（とりわけ商業者）が危惧しているのが、復興事業に関連する工事の終了である。事業の完了それ自体はもちろん歓迎すべきことなのだが、それは、工事関係車両（その多くがダンプカー）が姿を消し、工事に従事する人も地区から消えることを意味する。そこに来て、上述の三沿道（これ自体が復興工事でもある）が完成すれば、市街地を通る国道45号の交通量は極端に減少してしまうだろう。まちの「サービスエリア化」は、このことを念頭に置いた構想でもある。

住民の「溝」と(再)結束

田老の住民はつながりが強い、と言われる。それを象徴するものとして、毎年開催され、2016年で第70回となった田老地区体育大会（住民運動会）がしばしば挙げられる。被災後、2011年の10月にも実施され、それからも毎年絶やさず行われてきた。しかしこの運動会について、住民からは「かつては（田老内の各）地区対抗だったから燃えた。被災後にそれがなくなって、以前ほど盛り上がりなくなり、年々参加者が減っている」という声が複数聞かれた。

ここから考えるに、住民の日常的なつながりの単位は、「田老」よりも「地区」だったのである。それは、住民同士の「つながり」が、隣近所の近しい付き合いの中で築かれるものであることを考えれば、当然のこととも言える。しかし今回の市街地再建は、その

「隣近所」の関係をいったん初期化する。三王団地の区画は、かつての町内の単位とは関係なく割り当てられ、区画整理事業地も換地によってかつての街の形が大きく変化する。自主再建を選択せず、災害公営住宅に入る世帯もある。住民は、「隣近所」関係の再編を余儀なくされるのである。

もちろんそれは「ゼロからのスタート」ではない。人々はやはり「同じ田老人」という意識を共有しているし、田老では他地区の住民でも顔見知りということはまったく珍しくない。ある高台住民は、今はまだお互いが「様子見」をしているような雰囲気があると語ったが、一定の時間さえあれば、新しい隣近所の関係、地区の関係は、さほど苦も無く築き直されるのかもしれない。三王団地では、2017年2月に2つの自治会が正式に結成され、役員や規約などが決められた⁹⁾。高台においては、「つながり」の再建の足がかりは築かれたのである。

一方で、別の高台住民は、近所づきあい、コミュニティのあり方が「現代風」になっているのを感じる、被災前のような地区の関係はもう戻らないだろう、という実感を語った。また、被災前は店舗兼住宅で商売をしていたが、店舗を平坦地で再建、住宅を高台に移した住民は、被災前は一日中地域にいたけれど、今は朝早くに家を出て夜に帰る生活になり、地域との関わり方が大きく変わった、と話した。かくして、どれだけ時間が経っても、被災前とまったく同じ形の「つながり」が取り戻されることはないのかもしれない。それならば、新しい「つながり」の形を模索していく必要がある。

また、「同じ田老人」たちの間に、被災後の歩みの中で、ある種の「溝」が走ってし

まっていることも事実である。田老の被災者の大多数は、市街地から北に7kmほどにあるグリーンピア三陸みやこに避難し、その敷地内に建てられた仮設住宅に入居した¹⁰⁾。この「物理的集約」が、地域のつながりを維持するのに役立ったと言われる。それに対し、住家が津波に耐えて（あるいは浸水を受けずに）残されたために、引き続き田老の中心部に住み続ける人たちが存在した。この、家を流されなかっただという意味での「非被災者」がグリーンピアに足を運ぶと、「被災者」に「あなたは家残ったでしょ」と責められるようなことがあったという。しかし「非被災者」は、電気や水道などのライフラインが絶たれ、心細い思いをしながらも、自衛隊と共に被災物の撤去に従事するなど、被害を受けた直後の市街地の復旧に携わったりもしていた。にもかかわらず、物資や支援の手は、「わかりやすい被災者」が集まるグリーンピアに集中する。このような状況では、両者の間に亀裂が生じない方が不思議だったろう。

このような、いわば「対立的な溝」だけではない。「非被災者」の中には、「自分のところは家が残って申し訳ない」という思いを持ち、それゆえに「被災者」との付き合い方に葛藤する人たちも少なくなかった¹¹⁾。これによつて生じたのは、いわば「消極的な溝」である。そして、一人の「非被災者」の中で、「被災者」への反感・抵抗感とこのような受け目が両立することもあったに違いない。

こういったことは、被災直後に集中的に起つた事象であろう。しかしその後も「目に見えない壁」や、時に目に見える軋轢が残り、それは今でも完全に消えてはいないと話す住民は少なくなかった。「非被災者」の中には、「立派に」整備された高台を「あそこ

はどうせ「被災者」が行くところでしょ」という目で見る人もいる。また、被災後のまちづくりについて議論をする時にも、どうしても話し合いの中心にいるのは「被災者」になりがちで、そこから「非被災者」の声は届かないという意識が広がる。

以上は家を流された人と、流されなかつた人の「溝」である。だが、同じように家を流された「被災者」の内にも、別の「溝」が走つた。それは、冒頭に触れた、高台移転か現地再建かをめぐる大議論の帰結である。この議論の過程で、最初から平坦地に残ると決めた人は、かつての土地への愛着を理由に、ほとんど意見を変えることがなかつたという。それに対して、三度も壊滅した市街地にまた家を（あるいはその他あらゆる施設も）建てるなんてあり得ないという高台移転派の思いがぶつけられ、感情が火花を散らした。かくして、高台の住民と平坦地の住民の間には、どこか「しこり」のようなものが残り、いまだに互いの選択を尊重できない人もいるといふ。筆者が話をうかがつた田老の人々は、二つの再建市街地を指すときに、「上」と「下」という、これ以上ないほどの価値判断を帯び得る用語を避けて、「高台」と「平坦地」という言葉を注意深く選択していた。それはある意味、この「しこり」がもたらした表現のようにも見える。

要するに、再建後の田老は、市街地の立地的には高台と平坦地に二分割されるわけだが、被災様態と居住場所で見れば、住居を失い高台に再建する住民、住居を失い平坦地に再建する住民、住居を失わなかつた住民に「三分」された、とも言えるのである。しかし、ただでさえ人口が減る中で、住民の「三分化」は《地域資源》を分散させてしまうだ

ろう。そしてなにより、それほど広くない範囲内に暮らす人たちの間に、ギスギスした／しつくりしない雰囲気などない方がよいに決まっている。

商業者の中には、商店という場や商売という活動を通して、田老の住民のつながり、あるいはまとまりを再建していきたいと考えている人もいる。中小企業庁のいわゆる「グループ化補助金」の申請にあたって、田老の商業者30者（高台に店を再建した商業者、平坦地に店を再建した商業者、被災を免れた商業者が一様に含まれる。住居もそれぞれ）が「再生！田老まちづくりグループ」を結成したのは、その考えが結晶したものに違いない。

時の流れ・めぐり合わせの試練

田老における復興関連事業は、行政の論理から言えば、おそらく猛スピードで展開してきた。しかしそれでも、市街地に住居や商店を構えることができるようになるまでに、実際に4年半の歳月を必要としたのである。まちづくり協議会の主要メンバーの一人は、2013年秋の時点ですでに「この2年半ですごく気力が薄れている」、「みんなでやろう！」という高揚感が今のまちづくりには見られない。誰かがやってくれるんじゃないかなあ、という人まかせみたいな雰囲気」になっていると語った。現在は、そこからさらに3年半が経過しているのである。時の流れは「年齢との闘い」をも生む。住宅や商店の再建にあたって借入をしようとするとき、高齢が壁になって審査を通らない。また、病を得て、店舗兼住宅の再建をあきらめ、災害公営住宅に入居する人も出ている。6年というのは、そのような

時間である。

時の流れだけではなく、めぐり合わせ＝タイミングの問題もある。2015年の秋口から市街地の再建が本格化したが、それは、自己資金で住宅を建てる住民や、店舗・事務所を再建する商店主（言うまでもなく、その両方の立場でもある人もいる）にとって、まさに再建の時であることを意味する。それは個人個人にとって「自分の城」の設計であり、「人生で最も高い買い物」であることが多い。よって、それに心血が注がれるのは当然のことである。そしてその時、地域のこと、自分以外のことには目が向きにくくなる。仮にそちらの方向への意識を持ち続けていたとしても、物理的な時間は「自分のこと」に多く割かざるを得ない。そこに、資材不足や人手不足による建設費の高騰がのしかかる。大きな金額の買い物における相場の変動の影響は、とりわけ一個人にとって計り知れないほど大きい。出していた設計を取り下げて、建坪を小さくしなければならないかもしれない。そうしないなら、借金が増えるかもしれない。そういうことに悩めば悩むほど、地域づくりへの意識は遠ざかっていく。

被災後ここに至るまでに繰り返されてきた住民間の議論の焦点が（防潮堤に代表される）ハード面に集中し、ソフト面に意識が向かないことを一貫して問題視してきたまちづくり協議会の中心メンバーは、住宅のことを「自分のハード」と形容した。長らく繰り返されてきた「公共のハード」ばかりについての議論が（ともあれその「ハード」の整備がほとんど済んだ／着手されたことで）ようやく収束し、やっと「公共のソフト」の話に移れるかと思えば、今度はそれが「自分のハード」の建設に閉じこもる。それがこれま

での田老で起きてきたことだった、ということであろう。

かくして、「自分のハード」の整備と「公共のソフト」の構築について考えるべき時期が、ぴたりと重なってしまうという、ある意味で構造的とも言えるタイミングの問題を抱えながら、田老のまちづくり（＝「つながり」の再建と「にぎわい」の創出）は進められなければならなくなつた。ただ、住民自身も想定していなかったような短期間のうちに、高台を中心に住宅が一気に再建されたことは、ひとつ好材料であろう¹²⁾。いまや多くの住民はスタートラインに立っているのである。

「まちのこし」のために

以上、決して明るいとは言えないことを多く書き連ねてきた。それでは、これから田老で何が目指され、なされるべきなのだろうか。目標は、定住人口を（劇的に）増やそうとすることでも、交流人口を（劇的に）増やそうとすることでも、それらの結果として田老を「カネを稼げる」ような空間にすることでもない、と筆者は考える。《何かや誰かのせいにせず、あきらめずに、「規模に見合った形」で「自分たちでやれる範囲のこと」を「せめてやる気を持って」やる》。これは、ある住民が語った言葉である。

目指すべきは、「まちおこし」ではなく「まちのこし」ではないだろうか。それは、まずなにより、田老に残った人たちが、田老というまちを、そこで人々が幸せに暮らしていけるような形で「のこす」ことである。地域に残った小・中学生たちの安全を守り、学校だけでなく地域で育てる。高齢者の買い物

や通院など、日々の暮らしを支える。独居の人を孤立させない。地域の人が（あるいは旅で通りかかった人も）集まって「お茶っこ」できるような場や雰囲気をつくる。次の津波災害に備えて話し合いや訓練をする。住む人が趣味・生きがいにできるような、小さな商いや活動の機会を生み出す。

そういう細やかな、言うなればありふれた活動を積み重ねつつ、田老を外へ、そして未来に向けて開き・つないでいくこともまた「まちのこし」である。そのためのよすがとすべきは、突飛に聞こえるかもしれないが、防浪堤ではないだろうか。これと同じような構造物は全国の津々浦々にあるし、今回の津波で被災した各地では、破壊された防潮堤が（時にかつてよりも高く大きく）再建され、あるいは新しい防潮堤が建設される。だが、この構造物にこれほどまでの歴史や記憶を絡めさせ、情念を注ぐ地域は、他にはない。

田老一中の校歌は「防浪堤を 仰ぎみよ／試練の津波 幾たびぞ／乗り越えたてし わが郷土／父祖の偉業や 跡つがん」と歌われる。田老で大正年間から商いを続ける田中菓子舗は、主力商品のかりんとうの他にも菓子を製造しているが、その中に「防浪堤」という名の洋菓子がある。また、道の駅で営業を再開した善助屋食堂は、新メニューとして「防浪堤カレー」なるものを考えているといふ¹³⁾。これらに象徴的のように、田老の人たち（おそらく大部分）は、防浪堤にひとかたならぬ愛着を持ち、それをある種自分たちのアイデンティティとまでしている。

手放しであらゆる防潮堤を肯定するつもりはない。しかし、防浪堤は、田老の歴史を抱き込みながら、そこに「在る」。それは、田老という町の実存と深く結びついているので

ある。もちろん、防浪堤が「在る」ことだけで済ませるわけにはいかない。明治、昭和の津波の記憶を語り継ぎ、「津波防災の町宣言」まで行っていたこの田老で、181人の命が失われた。田老は確かに、「忘災の町」（ある住民の言葉）になっていたのかもしれない。防浪堤に寄り添う「防災の町」を再建し、それをあらゆる人（田老に住む人にも、外から田老を訪れる人にも）に、後世にまでわたって伝え続けること。これこそ、田老が田老である意味であり、田老の「まちのこし」の意味につながっているように思えるのである。

明るい未来は約束されてはいない。しかし、「芽吹き」もある。いま田老で、ボランティアやNPO活動、若手中心の研究会に携わるなど、これまでとは少し違う形で、地域のことについて考え、活動する若者が現れ始めているという。確かにこれは、小さな希望である。

直近で田老を訪れて、筆者の印象に残ったことをいくつか挙げてみる。まずは、野中地区の復旧農地で栽培されたソバを使用した十割そばを提供する「はなや蕎麦たろう」の本設店舗の開店。このソバの栽培と蕎麦屋の起業は、被災後の田老における《新しい企て》の代表である。次に、道の駅の産直館「やませの丘」で売られていた手作りの鮭とば。田老は「鮭のまち」である。しかし、特産の新巻鮭は、立ち寄りの旅行者が気軽に買えるようなものではない。そこで、要冷蔵ではなく、鞄に入るサイズで、価格も手軽な鮭とばならば、気軽に「田老の味」を求めることができる。

また、地元の方の案内で、今回初めて真横から観た名勝・三王岩の雄大さと、あの日の津波によって海側から運ばれた巨石「津波

石」に根付いた小さな松の生命力には心を打たれた。三王岩への遊歩道は一部が破壊されており、現在、多くの観光客は上の展望台から眺めるのみである（筆者もそうだった）。遊歩道は依然手つかずのままだが、展望台付近から海岸に下りることのできる階段の整備がようやく始まっていた。その背後には、遊歩道の早期復旧・整備を求める署名を集めた、住民の活動があった。

こうして田老のあちこちに、少しづつ「点」が生まれている。「点」があるだけでもよいのだが、それは「線」で結ぶこともできるはずである。「線」が増えれば、それは「面」になりうる。「点」の数が多いほど、引くことのできる「線」は増え、多様な形の「面」を描き出すことができるだろう（比喩を走らせすぎかもしれないが、その「面」は「(立)体」をも構成しうる）。田老に、小さくとも美しい形の「面」や「多面体」が現れ、まちが「のこさ」れていくことを筆者は願う。

忘れてはならないのは、どんなささやかな「点」であれ、誰かが何かの事を起こすことでしか生み出されないということである。「線」を引くことも、「面」を描き、「多面体」を組み立てることもまた然りである。最後に、この地で被災後ずっと走り続けてきたよう見える、ひとりの「商人」の言葉を紹介して、結びに代えたい。

誰かがやらなければならぬけども、誰かにやらせるのではなく、自分がやらなければいけない、っていうのは強く思っている。理解はしてもらえないかもしれないけど、そういう「馬鹿」がいてもいいんじゃないかな、とは思ってますね。

※本論文は、日本学術振興会の科学研究費補助金（課題番号 25285048）を受けて行った研究の成果である。

注

- 1) 田老の防潮堤の呼称は入り組んでいる。まとめるに、「(第)一線堤 = 第2防潮堤【図の灰線】 + 第3防潮堤【図の白線】」
「(第)二線堤 = 第1防潮堤【図の黒線】 = 防浪堤」となる。「(第)○線堤」は海側からの立地順序による呼称、「第○防潮堤」は建設された順序による呼称。「防浪堤」は、昭和三陸津波の被災を受けて1934年に建設が始まった当初からの呼称であり、地元の人々の愛着が深い呼び名である。今回の津波は、一線堤のほとんどを破壊したが、防浪堤は健在であった。
- 2) 「[わが街・田老の中心部再生] 再建 住み慣れた低地に」『読売新聞』2015年10月10日朝刊、31面。
- 3) 復興庁「公共インフラに係る復興施策〔平成28年7月29日〕」
http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-3/2016/20160729_Iwate07Miyako.pdf
- 4) 「〈検証変貌するまち〉安心感と不便さ同居震災5年(中)先行地の苦悩」『河北新報』2016年3月7日(デジタル版、http://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201603/20160307_31012.html)
- 5) 2017年1月時点で、130戸強がすでに建設済みのようである。津田時計写真店facebook アカウント 2017年1月10日付投稿
<https://www.facebook.com/tsudatokeisyashin/posts/702793736568128>
- 6) 正確に言うと、団地の最奥から国道に接続する新しい道路が建設されたため、完全な袋小路ではない。しかし、高台に通過交通が発生しないことに変わりはない。
- 7) 「[わが街・田老の中心部再生] どこで再建

揺れる商店主」『読売新聞』2014年10月15日朝刊、35頁。

- 8) 岩手県「平成28年度学校一覧」(http://www.pref.iwate.jp/dbps_data/_material/_files/000/000/019/767/h28ichiran.pdf)によれば、田老一小の現在の生徒数は110人。学年別にみると、1年生：15人、2年生：12人、3年生：12人、4年生：22人、5年生：17人、6年生：32人である。現在の6年生は2011年4月入学であるから、震災発生の翌年度から児童数が大きく減ったことが分かる。
- 9) 三王団地は低い方から田老三王一丁目、二丁目、三丁目という住所表示となっており、一丁目についてはほぼ公共施設のため、一丁目・二丁目に一つ、三丁目に一つ置かれた、ということである。津田時計写真店facebookアカウント 2017年2月20日付投稿
<https://www.facebook.com/tsudatokeisyashin/posts/726286310885537>
- 10) 田老の被災者が住む仮設住宅は、田老市街地より南に5kmほどの樫内地区にも存在するが、グリーンピアが中心拠点になったために、樫内仮設の住民に十分に情報がいきわたらないこともあったという。
- 11) これと同じような「申し訳ない」という葛藤の感情は、身内など近しい人を亡くした人に対する、そうでない人の意識の内にも表れた。こちらはもちろん、「被災者」同士、「非被災者」同士でも起こり得る。
- 12) 一方でそれは、そのような短期間に「無理をして」住宅を建てた住民が少なからずいる可能性にもつながる。今後、経済的・精神的な反動が起きうることは考慮しておく必要があるかもしれない。
- 13) 「[商店街再建](下)にぎわいへ 観光客を意識」『読売新聞』2015年9月1日朝刊、31面。一部マニア間で話題になり全国各地に広がっている、ライスを堰堤、カレーを貯水池に見立てた「ダムカレー」(<http://damcurry.pw/>)から着想したのかもしれない。ただし今年1月時点では、まだ提供されていなかった。